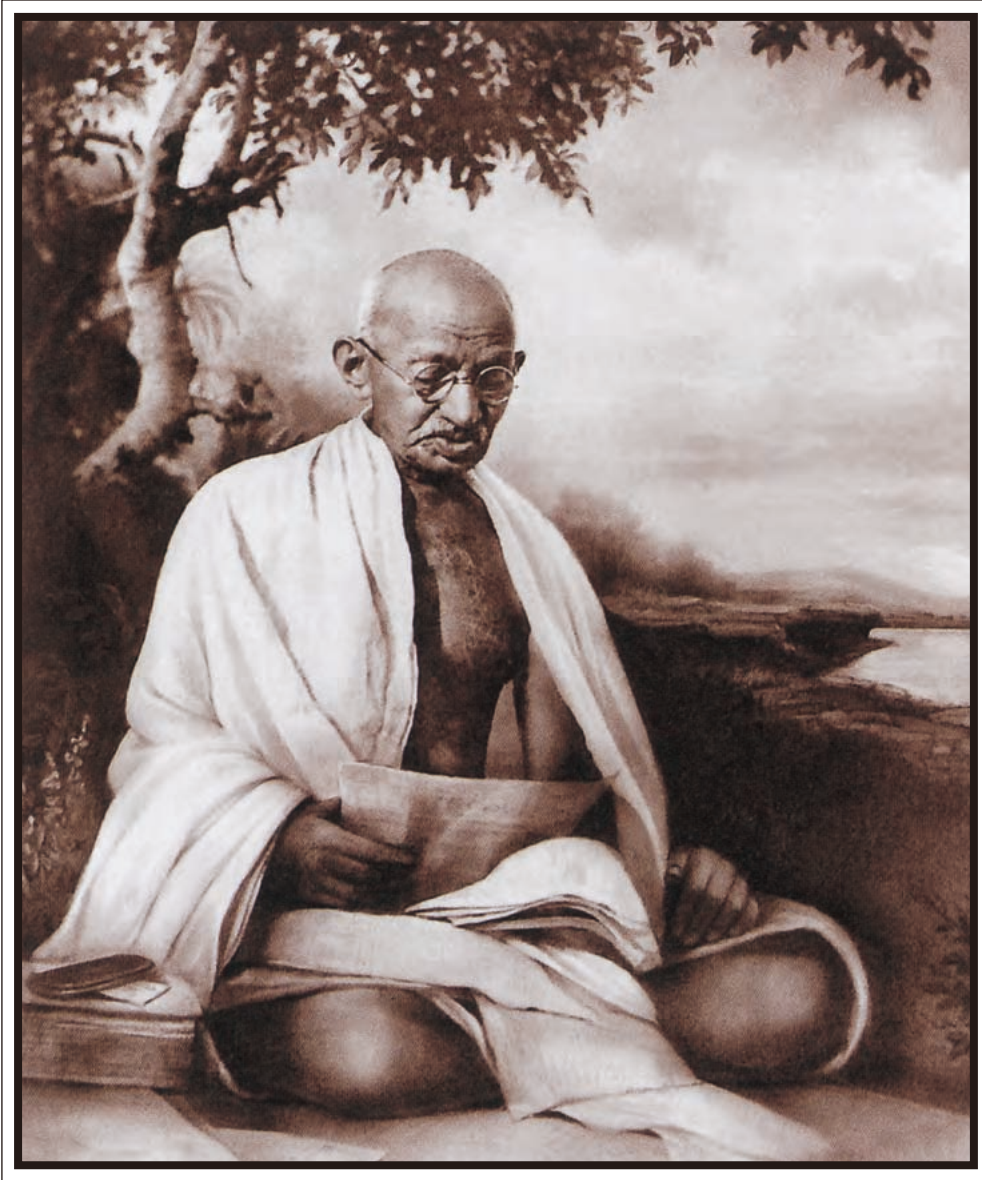


生涯教育月報

2017

春

季刊 No.113



評議員会および研究助成金授与式、論文入賞者表彰式

2

特別寄稿 「美術鑑賞」 35周年に寄せて

美術研究家 沼辺 信一さん

8

プロフィール・インタビュー

目黒区美術館 館長 秋山 光文さん

12



いつでも どこでも だれでも学べる

公益財団法人 北野生涯教育振興会
KITANO FOUNDATION OF LIFELONG INTEGRATED EDUCATION

評議員会および 研究助成金授与式、 論文入賞者表彰式

より充実した事業の創出へ



2016年11月11日、ホテルオークラにて評議員会および40周年記念彫刻コンペ表彰式、研究助成金授与式、論文入賞者表彰式が行われた。評議員会では、第43期決算および第44期予算が報告され、すべて承認された。

その後、会場を移し、研究助成金授与式、表彰式が行われた。冒頭、財団を代表して市橋淳平常務理事が以下のようにあいさつした。

「当財団は、1975年に設立され、2010年に公益財団法人の認定を受けて7期目に入りました。これもスタンレー電気様をはじめ、多くの方々にご支援をいただいているおかげと感謝しております。この場をお借りしてお礼を申し上げます。創立翌年から実施している研究助成金については、助成対象者の総数が95名になりました。年々、応募者のレベルが高くなり、審査員も選考に苦労されているようです。38回目となった懸賞論文のこれまでの総応募者数は11,298名となりました。」



あいさつする市橋淳平常務理事

今回の論文の課題は「私の『先生』」、誰からも、何からも学べる」でしたが、日常的な読書やテレビドラマからも、改めて何かを気づかされ、学べることがあります。当財団は小規模ですが、人間性豊かな人を育て、実りある人生を送れるように、そして自己の人格を磨くことができるように、

その生涯にわたって学びの機会を提供していきたいと思っています。今後とも皆様のお力添えを得ながら、公益財団法人としてより充実した内容の事業を創出し、提供してまいります。」

続いて、財団が行っているさまざまな事業内容を映像で紹介し、40周年記念事業として開催された彫刻コンペ入賞者の松井雅世さんに賞金が授与された。松井さんは「中目黒公園に黒御影石と伊達冠石で作った作品を設置しました。このような機会をいただけることは、彫刻を作り続けていく上でとても励みになります。これからも作品を作り続けていく糧にさせていただきます」と感謝の言葉を述べた。



彫刻コンペに入賞した松井雅世さん

研究助成金授与式

続いて、生涯教育に関連する調査、研究を支援するための研究助成金の授与式が行われた。今回は8名に給付し、6名が出席し、一人一人研究題目と概要を発表した。

「移民・移住女性の自尊感情を高める インフォーマルな学びについての考察」

大野 順子さん

(摂南大学 理工学部 建築学科
教職支援センター 特任講師)



来日した女性の中には、非常に高い密

度で学んでいる方がいます。女性のエンパワーメントが注目されるなか、その存在を社会に何らかの形でアピールしたいと考えています。

「地域博物館における セルフキュレーションを通じた 生涯学習の場の構築」

小西 公大さん

(東京学芸大学 教育学部
准教授)



ローカルの今にもつぶされそうな博物館を再活性化するため、地域の方が自らの力で世界や文化を学び、展示やワークショップを開くセルフキュレーションができないかと考えています。

「生涯学習のための電子教材作成と、 それらを効果的に活用した eラーニングの方法の開発」

駒崎 伸二さん

(埼玉医科大学 解剖学 准教授)



バーチャルリアリティの技術を使つて、大学内で行われている授業と遜色ない内容の講義を喫茶店や電車内でも利用できるシステムを作ることを進めています。

「地域伝統文化を通じた生涯教育の可能性の研究」「地歌舞伎」盛衰の検証と保存活動の将来」



中村浩一さん
(岐阜県教育委員会
社会教育文化課
伝統文化財係課長補佐)

現在岐阜県では29の地歌舞伎保存団体が活動しています。さまざまな年代の人たちが、学びという観点から地歌舞伎や地芝居をどう捉えていくのかということ、を研究します。

「学齢期及び若者期からの社会参加支援と生涯学習のためのソーシャルスキルプログラム実践・報告・研究」



前嶋 深雪さん
(東京学芸大学 国語科教室
非常勤講師)

今後は福祉と教育がもつとコラボしていく時代だと考えています。また、人が学び続けるためには人と関わる力が必要で、その機会を提供していきたいと考えています。

「高齢者の行動意欲を向上させるロボットデザインに関する研究」



松本 光春さん
(国立大学法人電気通信大学
准教授)

人の仕事を奪いやる気をなくさせるロボットではなく、少し手をかけてあげない

と頑張ることのできないロボットをデザインし、ロボットのユーザーのやる気を引き出すことを研究しています。

論文入賞者表彰式

最後に、第38回懸賞論文入賞者の表彰式が行われた。今回のテーマは、「私の『先生』—誰からも、何からも学べる」で、全国から377編が集まり、19編が入選した。表彰式には7名が出席し、市橋常務理事から表彰状と賞金が授与された。



前列左から、感王寺美智子さん、市橋常務理事、小笠原論文審査委員長、國西嘉代子さん、後列左から、江角岳志さん、三上香子さん、森千恵子さん、滝和子さん、大西賢さん

第1席「共に暮し、共に学ぶ」

感王寺 美智子さん

(宮城県・55歳・主婦)

今回のテーマは、気仙沼の仮設住宅で被災者の皆さんと暮らす日々の中で思っていたことでした。被災地で絶望の中から未来を学ぼうとする人たちの心に触れ、やっとならぶ親の厳しさが分かるようになりまし。良い生き方を志し、そのために生涯学び続けることが亡く

なった父への親孝行の続きだと思っています。

第2席「二人三脚の紐が解けるまで—共に学び育み合った日々—」

江角 岳志さん

(東京都・53歳・事業開発コンサルタント)

妻を亡くし、男手一つで3人の子どもを育ててきました。三男が障がいを持って生まれため、最低限食べる分だけの仕事をして、あとは子どもを育ててやってきました。社会のいろんな面を見ることができたことが、一番勉強になりました。

第2席「義父の人生から学んだ事」

國西 嘉代子さん

(愛媛県・58歳・学童保育支援員)

義父の人生から、「人のために生きる、苦難から逃げない、人のせいにならない、前向きに頑張る、感謝を忘れない……」多くのことを学びました。入賞すれば本になって、義父の人生を広く知ってもらえると思つて、応募しました。

第2席「死に逝く者の学びから得たこと」

三上 香子さん

(大阪府・55歳・生涯学習音楽指導員)

がんで余命宣告を受けながらも学び続けた放送大学の学友のことを書きました。友人のように学びながら人生を終えたいと願っています。賞金は、友人が好きだった先生の絵を飾る額の購入資金として大学に寄付します。

第3席「文通」

大西 賢さん

(東京都・43歳・会社員)

70歳になった父が読み書きをもう一度学び

たいという思いから、父と息子の文通が始まりました。読み書きを教えているのは私のほうですが、多くのことを教えてくれるのは父のほうです。私の先生です。もうしばらく文通を続けたいと思います。

第3席「フォーカル・ジストニアという困難を乗り越えてみて」

滝和子さん

(神奈川県・51歳・音楽教室経営)

指が動かなくなったときに、専門医にも治らないと言われたので、自分で何とかしようと最初に手にしたのが理科の教科書でした。体の仕組みを勉強し直して、ピアノを再び弾けるようになりました。学校の勉強は、知識の根幹です。

第3席「祖母の独りごと」

森 千恵子さん

(福岡県・68歳・主婦)

主人の祖母から、多くの知恵を授かりました。平凡だけど淡々としたがれない生き方や人生観は、私の老後の支えになっています。今、土曜日の午前中に孫と一緒に勉強しています。学ぶことはとっても楽しいことです。

表彰式の後、

懇親会が行われた。音楽奨学生、露され、出席者の皆さんは時間、会話を深めた。



音楽奨学生の演奏
大崎々々さん(ピアノ)と川瀬千音さん(声楽)

生きるための努力は、 すべて学びである



明治大学教授
小笠原 英司

誰からも、 何からも学べる

皆さん、こんにちは。今回の懸賞論文には、377編の投稿がありました。大変喜ばしいことだと思います。昨年は、当財団が40周年ということもあり、生涯教育そのものを真正面から考える「私の生涯教育―学ぶ楽しさ」というテーマにしましたが、今年もやはり同じ発想で「私の先生―誰からも、何からも学べる」とし、生涯教育の基本を皆さんがどのように体験されているかを募集しました。大変優れた多くの作品の中から、さまざまな議論を経て、19編を選ばせていただきました。本日は3席までに入賞された9名の方々のうち、7名の方々にご出席いただきました。皆さんおめでとございます。

誰からも、何からも学べる。まったくその通りだと思います。基本的に、人は人から学びますので、身近な家族、友人知人、師弟関係など、さまざまな出会いから多くのことを学びます。先生だけでなく、生徒から学ぶこともあります。

最近、妻から毎日のように、「あな

たは本当に人付き合いが下手だから、定年退職してからどうするの？私のようにいろいろな人とお付き合いをしないと卑屈なおじいさんになってしまいますよ」と言われます。確かにその通りだと反省はしています。妻が言うほどひどくはないと思っただけですが(笑)、もう少し努力して、いろんな方とお付き合いをしたいですね。

そして、止むに止まれぬ探究心から学んだ体験も論文集の章としてまとめました。指がうまく動かなくなるという難病をご自分の研究で克服して、再びピアノが弾けるようになったという体験です。それぞれの学びの機会を活かし、そこから学んだことが、皆さんの人生をいかに豊かにしてきたことであるかと思い、皆さんの人格的成熟に敬意を感じました。

「先生」を尊敬し、 感謝する

皆さんの作品を読んで、「生きる」ことは、「学ぶ」ことだと、つくづく考えさせられました。人間が生きる世

界は多種多様な無数の要素に満ちています。それらは人が生きるうえでさまざまな制約になります。逆にそれらを利用しなければ生きていくことができません。その中で、自分の生きる道を探索し、生きていく方法を考えます。つまり、人は「生きる」

ための努力をしようとすると、好むと好まざるとにかかわらず、生きるうえですべての必要と障害について学ばざるを得ないので。もちろん、生物学的に「生存」するだけであれば、無自覚的に生きることもできますが、それはもったいない。もっと自覚的に学ぶという姿勢で生きることができれば、さまざまな向上の喜びを体験することができらるだろうと思います。

さて、今回は「私の先生」というテーマですが、日本人は「先生」という言葉が好きですよ。世の中には「先生」がたくさんいます。狭義の意味での「先生」は職業上の教員ですが、研究者や医師や弁護士のような高度専門職の方々も「先生」、さまざまな分野の専門家も「先生」、各分野の師匠も「先生」と呼ばれます。ちな

みに私がいあまり好きではないのは、大きな顔をしている政治家が「先生」と呼ばれていることです。

とにかく広義の意味では、何かを自分に教えてくれる人たちや物事が「先生」になります。日本では、教えてもらうことに感謝し、それがさらには崇拜となって、「先生」は偉い存在ということになっています。私は職業上「先生」という仕事をしてきましたが、偉くはないと思っています。相手に対する尊敬の気持ちは、悪いことではありませんが、先生の側は、謙遜することを忘れてはいけません。ただし最近、我が国では他人に対する感謝の気持ちや尊敬の念が薄れていきますから、「先生」がたくさんいることは、良いことかもしれません。

学び上手な日本人

日本列島に住む人々はおもともと、太古の昔から非常に学び上手な人々であったことが知られています。長い年月のなかで、自然環境や災害、渡

来人から学び、自覚・無自覚のうち「学び文化」の土壌を培ってきました。江戸期には、武士階級の藩校のほか庶民のための寺子屋制度もあり、当時の識字率は世界最高レベルにあつたと言われています。その後、西欧の学校制度の導入によって近代化を急ぎ、戦後はアメリカの教育制度との折衷によって日米欧の多国籍型教育制度に至っています。さらに、日本

の教育には、パーソナルな関係のなかでの後継者育成や師弟関係での伝承、小規模な私塾での子弟教育といったバラエティがあります。それは単なる知識や技能・技術の継承だけでなく、人間の在り方や生き方を学ぶ重要な機会としての役割を果たしてきました。その典型が「道場」での学びです。武道、書道、茶道、華道など各種分野にわたっています。一つの分野（道）の奥義を極める、何事も徹底好きの日本人に合った考え方はないでしょうか。

最後になりますが、皆さんの論文を拝見し、文章表現が大変お上手だと思えました。日々、書くことを研鑽されているからだと思えます。昨

年も申し上げましたが、話すことや意見交換することも大切ですが、もっと大切なのは、書くということ。自分の考えや他人の考えを受け止めた上で整理し、文章に表し、何度も推敲を重ね、論理的に優れたものにしていくことが、読む人に感動を与えます。ぜひ今後も、書き続けてください。

〈私の生涯教育実践シリーズ'16〉

『私の先生』

—誰からも、何からも学べる—

1,000円

ぎょうせい刊

ご希望の方は財団事務局までどうぞ。



第32回 彫刻奨学生作品展

2016年12月6日～21日、日本大学芸術学部江古田キャンパス内で、「第32回 彫刻奨学生作品展」が開催されました。

5人の奨学生の作品が展示され、多くの方に鑑賞されました。



多摩美術大学大学院
川端 豊子さん
「器」

この作品は、表面のすべらかな肌触りと布で包み込むようなかたちで人を惹きつけ、座った人の体温と恐怖の感情を糧に生きています。今もどこかで、誰かに座られるのをひっそりと待っているかもしれません。



日本大学大学院
栗原 利記さん
「生きる姿勢」

天を見つめて、自分自身の生き方や時間について思い、生きることの意味について深く考え込んでいる姿が、私には生きる姿勢のように感じるので。猫の姿をしているのは、私が猫好きだからです。



武蔵野美術大学大学院
保坂 航子さん
「海、精」

儂く脆い抽象形態を彫刻に表現しました。「石（岩）に花を咲かす」とは起りえないことの喩えで仏教にも「生々流転」という語があります。女性が家庭を持ち学ぶ困難を財団のご支援に支えられました。より高みを目指して一生涯学び続けたいと思います。

◀ 作品を見る作者と家族



日本大学
青野 真澄さん
「Fake fur」

イメージを形にするこの繰り返りで生まれた作品の一つです。鳥は私を表し、木は自分を取り巻くすべての環境を表しています。環境は移りゆき、形を止めることがとても困難です。その一つの答えとしてこの作品が生まれました。自分と、周りの関係性で作品ができてきます。

藤壘 大窪いやしの杜公園にて 彫刻土台制作のための打合せ

公園内に群生するミズバショウの開花に合わせて3月26日、お祭りが開催されます。お祭りに来場する大勢の方々に、ミズバショウとともに彫刻作品を見ていただけ



るよう、彫刻設置を間に合わせるため、1月20日、鞍掛日本大学教授、上記5名の彫刻奨学生、笛吹市の関係者、北野財団関係者および施工業者が一堂に会し、現場で打合せを行いました。今年で、66点の彫刻作品が設置されることとなります。



日本大学
河原崎 未貴さん
「友人像Ⅱ」

私は、人や動物など自然がつくり出す生きもののかたちを追求しています。その中でも、普段から深く関わりのある家族や友人をモデルにすることが多く、この作品も自分が見る友人らしさを表現しています。

2016年 外国人奨学生奨学金授与式

当財団では、海外の学生で貧しくても成績優勝な学生を支援し日本との友好関係にも寄与したいとの考えから、1999年中国の南開大学からスタートし、2003年から天津大学、2006年から広東工業大学、2007年からベトナム国立農業大学、ズンサ高校、2010年からフィリピンMCL、2014年からベトナム財務・経営管理大学、2016年からインドネシアポリネス大学と展開してきました。

2016年もベトナムにおいて、9月5日ズンサ高校にて入学式に合わせて25名に奨学金を授与しました。10月には、国立農業大学の奨学生15名に、さらにベトナム財務・

経営管理大学の奨学生20名に奨学金をそれぞれの授与式において授与しました。中国においては、12月8日に広州スタンレー（GSE）にて富永総経理、中村副総経理はじめGSE関係者出席のもと、広東工業大学学生課 藍副部長、雷先生と奨学生14名を迎え、財団からは市橋常務理事、城事務局長が出席し授与式が行われました。GSE挨拶、財団挨拶、学校挨拶の後、奨学金証書を奨学生に手渡しました。その後奨学生はGSEの工場見学を行い、終了後の質疑応答では活発な意見交換がされました。

ベトナム

ズンサ高校

ベトナムスタンレー（VNS）のあるザラム県の高校。VNSに近い。



奨学生と関係者の皆さん



ヴィン部長より奨学金授与

国立農業大学

ハノイにある国立大学ハノイ農業大学からベトナム農業大学へ昇格した大学。



ベトナムスタンレー ヴィン部長と奨学生



学生による入学式アトラクション

財務・経営管理大学

VNSのある隣のフンエン県にある財務省管轄の大学。VNSに近い。



ベトナムスタンレー 古仲社長と奨学生の皆さん



古仲社長より奨学金授与

中国

広東工業大学

大学3校を合併して1995年に設立された広東省重点大学。



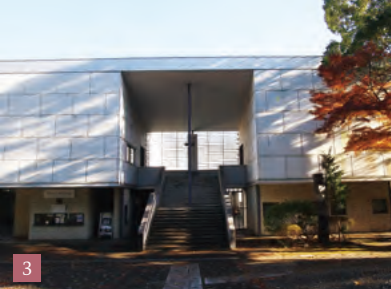
奨学生と関係者の皆さん



市橋常務理事より奨学金授与



広州スタンレーを見学する奨学生



3



4



2



1

「美術鑑賞」
35周年に寄せて

美術館をめぐる 「果てしない旅」

北野財団の「美術鑑賞」——美術館をめぐる研修会は、今年で三十五周年を迎えます。この三月の「宇都宮・館林の美術館を訪ねて」は第五十四回。確実にひとつの歴史が刻まれていることに気づかされます。

この原稿のために編集部が提供してくれた資料によれば、私がこの研修会の講師としてツアーに同行したのは、「新緑の信州、美術館めぐり」(一九九五年五月)が最初でしたから、それから二十二年の歳月が流れています。

皆さんと一緒した美術館見学の旅も、北は青森から南は倉敷まで、すでに通算三十回を超えました。旅の歴史の三分の二ほどを、案内役として過ごしたことになります。そう思うと、なんだか感慨深いですね。

一九九四年の暮れ頃だったと思うのですが、初代講師である坂本満先生から当時の職場に電話があり、「自分の後任として講師を引き継いでほしい。沼辺君ならやれると思うよ」と勧められました。実はその数年前、坂本先生は「美術鑑賞」ツアーを率いて川村記念美術館(千葉県佐倉市)へも来訪さ

れたことがあり、そのとき学芸員として応対し、作品を解説したのが私だったのです。「あのときみたいにな、わかりやすく説明してくれればいい」という話でした。

作品解説は「ガイドツアー」と称して来館者に向け連日やっていたし、バスに添乗して各地の館を訪ねる旅もわが美術館の「友の会」で経験済みなので、いわば自分の日常業務の延長みたいなもの。「お安い御用だ」とばかり、深く考えもせずにお引き受けしました。北野財団がどういう目的をもつ団体なのか、それまで坂本先生がどんなふうに解説されてきたのか、まるで知らない白紙状態でした。そんなふうにならざるを得ない私も、やがて手渡された「生涯教育」のバトンの重さに否応なく気づくことになるのですが……。

「**展示会ではなく
美術館を観てほしい**」

首都圏に暮らす私たちは、美術鑑賞という面でも恵まれた環境にあります。内外の名品を集めた展示会が都心の美術館でひっ

さりなしに催される。居ながらにして古今東西の美術に親しむ機会が、それこそ手を伸ばせば届くところにあるわけです。だがその反面、次々と繰り出される展示会に追いつかれ、過剰な宣伝に乗せられて、長い行列に並ばされたあげく、人垣に揉まれながら「お宝」の前を通り過ぎる——それが私たち美術ファンの嘆かわしい姿でもあるのです。

上野の山を例にとるならば、東京国立博物館や国立西洋美術館で話題の展示会を見終わったあと、それだけで満足して(あるいはくたびれ果てて)、すぐ傍らの常設展示を観ずに館を立ち去る人々のなんと多いことか。「東博」ならば飛鳥時代の仏像がずらり並ぶ「法隆寺宝物館」「西美」ではフランス近代美術の宝庫「松方コレクション」がいつでも間近に観られるというのに、もったいない話です。

期間限定の展示会も結構だけれど、美術館という場(そこには個性的なコレクションが並び、建物や周囲の環境が整えられている)にもっと目を向けてほしい——東京近郊で二〇世紀美術のコレクションを展示



沼辺 信一
(美術研究者)

- 1 奈良美智《あおり犬》に雪降り積む
- 2 直島を代表する野外彫刻
草間彌生《赤かぼちゃ》
- 3 神奈川県立近代美術館 鎌倉館
惜しまれつつ2016年1月末に閉館
- 4 日本最古の西洋美術館
大原美術館エントランス
- 5 水と緑が配されたモダンな建物
豊田市美術館
- 6 閉館間近の鎌倉館中庭にて
イサム・ノグチ《こけし》は
葉山館へ移設された
- 7 ロビーにて説明を聞く参加者
(青森県立美術館)
- 8 市川平《コンタクト・ドーム》の中で
記念撮影 (豊田市美術館)
- 9 外は 地吹雪
青森県立美術館メインエントランス



未知の美術館を 訪ねる楽しみ

する美術館に勤務する私は、声を大にそう叫びたい思いで日々を過ごしていました。旅先のパリやロンドンやサンクトペテルブルグでは美術館そのものを楽しむ日本人が、自分の国ではなぜ展覧会ばかり追い求めるのでしょうか。その「ダブル・スタンダード」が歯痒くてならなかったのです。

東京という街があまりに便利すぎるため、人々の美術鑑賞はともすれば受動的になりがちです。たいがいの美術展は都内で観られるような錯覚を抱いてしまうのですが、実際には東京の美術館抜きで巡回する魅力的な展覧会も少なくありません。

さらに付け加えると、私が講師としてツアーに関わったここ二十年ほどに限っても、他に類をみないようなユニークな美術館が各地に続々とオープンしており、首都圏に留まっただけでは体験できない新鮮な驚きをもたらしてくれる。そのことに気づくためにも、財団の「美術鑑賞」の旅はまたとない機会を提供しています。職業柄あちこちの美術館をかなり観てきた私にとっても、「こんな新しい美術館ができたのか」と目を丸くすることがしばしばです。

思いつくまま、これまでに訪れた美術館からいくつか実例を挙げてみましょう。

まず、二〇〇六年にオープンした青森県立美術館。広大な三内丸山遺跡に隣接して建つ真新しい白亜の建物です。シャガールの巨大なカンヴァス群や、大きな犬をかた

どった奈良美智作の野外彫刻もさることながら、私たちが訪れた一月には、純白の雪景色のなかに館がひっそり佇む光景が何より印象的でした。そのわずか二か月後、東北地方を襲った大震災とともに、忘れがたい思い出となっています。

次に、愛知県の豊田市美術館（一九九五年開館）。谷口吉生設計になる簡素でシャープな展示空間に、えり抜きの二〇世紀美術コレクションが常設展示されています。作品と建物、周囲の風景が一体となって醸し出される静寂の雰囲気、より多くの方々に体験してもらおうと、当ツアーでは一九九九年、二〇一〇年と二度、ここを訪問しました。いずれまた再訪する機会があることでしょう。

そして、これは昨年（二〇一六年）訪れたばかりで、記憶に鮮やかなのですが、瀬戸内海に浮かぶ直島（香川県）にある現代美術の展示施設が挙げられます。

小さな島には「ベネッセハウス・ミュージアム」「地中美術館」「李禹煥美術館」、それに古民家を再利用した「家プロジェクト」などが点在し、それらを一日かけて訪ね歩く新しいタイプの美術体験が提唱されています。少人数での鑑賞が基本なので、私たち四十名の団体は小グループに分かれての行動を余儀なくされ、分刻みのスケジュールで島内をめぐったのですが、それでも参加された皆さんは口々に「素晴らしい体験だった」「ぜひまたここに来たい」と興奮を語っていました。はるばるこの島までやって来れば、大都会では絶対に味わえない「一期一会」の感動が約束されるのです。

美術館をめぐる旅、これから

忘れずに付け加えておきますが、私たちのツアーでは最先端の目新しい美術館ばかり見学するわけではありません。直島を歩き回った翌日には、倉敷の大原美術館を訪れ、この日本最古の西洋美術館（一九三〇年開館）のオーソドックスな魅力を中心くまで味わいましたし、二〇一五年暮れには、諸般の事情から閉館が決まった鎌倉の神奈川県立近代美術館（鎌倉館）へ足を運び、思い出深いモダンな展示空間に別れの挨拶をしました。

私たちに十人十色それぞれ人格があるように、どの美術館にも異なった個性（コレクション、建物、歴史、使命）が備わっており、その違いを味わい、楽しむことが私たちの「美術鑑賞」ツアーの大きな目的です。個々の美術作品はもちろんのこと、美術館そのものが鑑賞の対象だといっても過言ではありません。何度も参加された常連メンバーはいつしか美術館の個性を見抜く「目利き」となって、日頃の美術鑑賞に励んでいることでしょう。

長く務めた美術館を辞して、今や一介の美術ファンに戻った私は、ようやく皆さんと同じ視線と立ち位置で、美術を純粹に楽しめるようになった——そう実感しています。

最後に、今後のツアーの予定ですが、今春の「宇都宮・館林」に続いて、秋には山陰方面の美術館を訪ねる旅を計画しています。近い将来、未踏の地である北海道や九州へも足を伸ばしたいと念願しますが、その一方で、身近な首都圏にもまだまだ珠玉のような館がいくつも残されている。美術館をめぐる欲びは尽きることがありません。

財団ニュース

ご報告



目黒区より 感謝状授与

当財団が実施している小・中学校への図書寄贈に対して、1月18日、目黒区から感謝状を授与されました。当財団は、7年前から毎年、目黒区内の生徒たちの心の糧になるようにとトータル6,627冊の図書を寄贈しています。



尾崎富雄教育長(右)より感謝状を授与される市橋淳平常務理事

お知らせ



第39回 事実に基づく小論文・エッセー募集 「変化」に挑む

万物は絶えず移り変わってゆきます。生活面で捉えれば、インターネットの普及は一瞬で世界を駆け、遠く隔たった様々な人々を繋ぎました。また、介護ロボットの開発やiPS細胞による再生医療への活用など、明るい未来への変化が期待されるようになってきました。

その一方で、世界情勢は自国第一主義を掲げるトランプ大統領の誕生やイギリスのEU離脱など予期せぬ変化に遭遇しています。不透明さを増す国際情勢の中、どのように日本人として生きていったらよいのかを考えなければならぬ状況です。こういった世の中の変化の中

で、流されることなく、どのようにして自覚して生きていくかという取り組みについて論じてください。

また、過去における変化を見てみますと、例えば自分の人生を振り返った時、災害や病気、肉親との別れなど辛く悲しい変化もあると思います。

あるいは、定年など人生の転機を迎え、人生をどのように切り拓いていくか悩み苦しんだ方も多いのではないのでしょうか。

こういった逆境から立ち上がり、今の自分をつくりあげ、わくわく心躍る時間を手に入れた体験談も大歓迎です。今、苦しんでいる方に救いのヒントとなるような小論文・エッセーの投稿をお待ちしています。

応募規定

縦書き400字詰め原稿用紙8枚〜10枚

締切

2017年5月24日(水)

賞金

1席(1編) 賞状・副賞50万円
2席(3編) 賞状・副賞10万円
3席(5編) 賞状・副賞5万円
佳作(10編) 賞状・副賞3万円

入賞発表

2017年8月初旬

表彰式

2017年11月10日(金)

第148回研修会 ライフプラン講座(その7) 50代から考える 夫婦のライフプラン

50代以上の皆様!現在65歳以上と定義されている「高齢者」を75歳以上に見直すよう求める学会提言がなされています。また、「ライフ・シフト」の著者リンダ・グラットン氏によれば今後は100年生きる前提での人生設計が必要であるとも言われています。今後の皆様のライフプランを専門講師の指導によって自ら作成する講座です。是非夫婦でご参加ください。

日程

2017年6月3日(土)
9時30分〜17時30分

会場

渋谷エクセルホテル東急
ウッドルーム(6F)

会費

夫婦で3,000円(昼食付)
(1人1,500円)

奨学生募集

学習意欲のある社会人を応援

奨学対象

・科目等履修生

・放送大学大学院修士全科生および選科履修生(ただし30歳以上または実務経験5年以上)
申し込み者の中から書類選考します。なお、奨学金は給付で、返済不要です。

締切

2017年4月28日(金)

〈科目等履修奨学生〉

奨学金 年間20万円

定員

15名以内

〈放送大学大学院修士全科奨学生〉

奨学金 2年間で20万円

定員

10名以内

〈放送大学選科履修奨学生〉

奨学金 年間7万円

定員

15名以内

伝統文化「歌舞伎」に親しむ

事前講演会(講師は北潟喜久氏)と国立劇場の「鑑賞教室」に参加する研修です。観賞後には



「鑑賞教室」会場風景

劇場内食事処での昼食が付く芝居見物をご体験ください。

日程・会場

第1回(中目黒GTPラザホール)
6月17日(土)14時～15時30分
第2回(国立劇場)
6月24日(土)11時～14時

演目

「歌舞伎十八番の内 毛抜」
姫君の髪が逆立つ謎を解き明かす愛嬌たっぷり主人公・糸寺弾正。古風でおおらかな雰囲気溢れたユニークな推理劇！

定員

80名

参加費

2,800円(賛助会員)
3,000円(一般)

表紙ギャラリー

当財団の使命は、一生学び続ける人を応援することです。学ぶ人が、今日よりも明日、一步でもよくなるよう努力するには、目標が必要だと思います。そこで、世のため、人のために偉業を成し遂げた偉人を目標に掲げたいと考え、財団機関誌の表紙に登場いただくことにしました。

ガンディー (1869～1948)

ガンディーは、イギリスの植民地であったインドで、宰相の父のもとに生まれ、インドの慣習に従って、13歳の時に同い年の少女と結婚しました。

18歳の時、妻子をインドに残しイギリスへ留学。21歳の時、弁護士資格を取りました。早速インドに戻り、弁護士の仕事に取り組んだものうまくいかず、南アフリカに渡りました。現地で大勢のインド人労働者が差別されているのを目の当たりにし、自分自身も一等のキップを持っているのに客車を追い出される体験をしたことから、人種差別撤廃運動に取り組んでいきました。20年におよぶ粘り強い非暴力、不服従運動を続けた結果、「インド人救済法」を勝ち取ることができました。

45歳になったガンディーは、再びインドへ帰国。イギリスからの独立をめざし、自分たちが必要なものは自分たちで生産しようと、民衆に「糸つむぎ」と「はた織り」を勧め、綿織物を輸入しなくてもすむようにしました。さらに、塩の独占販売を阻止しようと、自分たちの手で塩を集めようと数千人の「塩の行進」を行い、世界中の注目を集めました。

そして、ついに78歳(1947年)の時、インドはイギリスからの独立を果たしましたが、国内のヒンズー教とイスラム教との対立は激化、暴力の連鎖をとめようと説得したガンディーは、ヒンズー教過激派の青年に暗殺されてしまいました。

しかしながら、ガンディーの非暴力主

義は、黒人の人種差別運動を推進したキング牧師へ受け継がれ、公民権法成立に大きな影響を与えたのです。



写真提供：インド大使館

設立目的

当財団は、スタンレー電気株式会社創業の北野隆春の私財提供により、生涯教育の振興をはかる目的で1975年6月23日、文部省(現文部科学省)の認可を得て発足しました。当財団は、いつでもどこでもだれでも学べる体制をつくり、学ぼうとする方々に対し、より豊かな生きがいを持つよう、時代が求める諸事業を展開してまいります。

生涯教育だより 第113号

2017年3月10日発行
編集人 市橋 淳平
発行人 北野 重子
発行所 公益財団法人 北野生涯教育振興会
〒153-0053 東京都目黒区五本木1丁目12番16号
電話 東京 03(3711)1111

こ・ち・ら・編 集 室

ペットブームと言われるようになって久しい。ペットは生活に「潤い」と「癒し」を与えてくれますが、病気になる心配したり、永の別れに涙することもあり、良いことばかりとは言いません。

ところで、一九九九年、子犬型ロボット「アイボ」が発売され、世界中で十五万台以上も売れたことがありました。「アイボ」は、ユーザーとの会話を介して成長するロボットで、永遠の命を持ったペットと思われたのですが、十一年前に生産中止になってしまいました。壊れてしまったら、修理部品が手に入らず、動かなくなってしまうのです。ペットとしてかわいがられていた「アイボ」が、埃をかぶったまま部屋の片隅に打ち捨てられるということが起こるのです。

科学技術の発達は、近い将来、「アイボ」より高度に人間が伝えたいことを理解し、人間に伝えたいことを表現できる、双方向「コミュニケーション」がとれる人口知能(AI)搭載のロボットを開発することでしょう。

そういう世の中になった時、生身のペットがロボットに取って代わられてしまうのでしょうか? いえそんなことはないと思っています。ペットとの暮らしは、トイレの世話やいたずらなど不都合を飼い主に強いることで、人間性を鍛え、絆を深めてくれることでしょう。

これは何もペットに限らず、仕事や人間関係においてもいえることだと思えます。厳しい冬の先には、必ず温かい春がやってくるのです。



目黒区美術館 館長
お茶の水女子大学 名誉教授
放送大学東京足立学習センター 客員教授

秋山 光文さん

AKIYAMA TERUFUMI

いくつになっても 何かに興味を もち続けましょう



お茶の水女子大学の名誉教授で、現在、目黒区美術館の館長を務められている秋山さん。昨年、北野財団創立40周年記念で中目黒公園に設置した作品のコンペティションの審査員として北野財団とのご縁ができました。ご研究の内容や生涯教育についてのお考えなどを伺いました。

—秋山さんがインド仏教美術史の専門家になられた経緯から現在までのご経歴をお聞かせください。

祖父も父も美術史の専門家だったこともあり、家にあつた美術全集を絵本代わりに育ちました。さらに祖父母の家が北鎌倉の円覚寺の近くであり仏教彫刻に親しんでいたことにも導かれているかもしれません。インドに興味を持ったのは、大学2年生のときにお坊さんの団体に混じってインドツアーに参加したことです。インド亜大陸を横断するという20日間の旅行で、釈迦が



サーンチー遺跡で作品解説をする秋山さん



お茶の水女子大学の最終講義で、男声合唱

歩いた道や悟りを開いた場所を実際に訪れたばかりでなく、たくさんの仏教遺跡に足を伸ばして二千年以上前に制作された初期の仏教美術に触れたことで、異次元の世界に魅了されました。博士課程のときは文部省の派遣留学生としてデリー大学の大学院に2年間留学し、仏教がどのように造形に結びついたのかを探求しました。北から南までインド国内に残る仏教遺跡を取材して歩き、仏教美術がどのように始まり、アジア各地に伝播し展開していったのかを研究するようになり、現在に至っています。留学後から、非常勤講師を含めると34年間、大学で若い学生を教えています。一方、カルチャーセンターや放送大学でも講義を続けてきました。後者の受講生は、始めた当初は自分の親の世代でしたが、段々と年齢が近くなり、今では同世代の方々と情報共有をできることが面白く、学び合うような講義を楽しんでいます。現在は、目黒区立美術館の館長、放送大学とカルチャーセンターの講師、趣味の男声合唱という三足の草鞋で充実した日々を過ごしています。

—北野財団の事業については、どのような印象をお持ちですか。

奨学金事業だけではなく、生涯学習をはじめ非常に多種多様な援助を行っていることに感銘を受けます。このたびの野外彫刻の設置では、目黒区を美術の街として盛り上げることに貢献していただけて感謝しています。

また、現地を訪問して学ぶ歴史研修や伝承研修を長年続けていることも素晴らしいですね。同様にインド美術に限らず西洋美術や日本美術なども、写真集やインターネットの画像だけでなく、現地や美術館に足を伸ばして実物に接することは、とても大事なことだと思います。作品の大きさや質感に触れることで、興味の幅がさらに広がるはずですよ。

—生涯教育についてどのような考えですか。

教育は一過性のもではなく、生涯のものだと思います。理想は、学んでいた側がやがて教える側になる循環が生まれることです。目黒区美術館でもワークショップを30年続けていますが、最初は受講生として参加していた小学生が、現在ではボランティアとして指導する側に回っています。

これまで、小学生からご年配の方まで教えた経験がありますが、豊富な知識をお持ちの年配の受講生との授業は面白いですね。大学のカリキュラムの一環として受講する学生とは違い、ご自身の興味によって受講される方は、こちらがお伝えすることを一言も聞き逃すまいとなさる姿が印象的です。好奇心があれば精神的な年とはならないことがよく分かります。若い学生にはない質問が飛び出

し、こちらも勉強しないとイケません。受け止め方も文字通り十人十色で、分かりやすく面白い講義にしようという工夫することが自分の勉強になります。

—趣味は何ですか。

大学時代はグリーククラブの活動に明け暮れていました。現在も大学のOB合唱団の仲間と結成したボーカルグループ「TMW」で歌い続けていますが、2年半前のお茶の水女子大学の最終講義の際には、全国から集まってくれた仲間たちとともにサブライズコンサートをご披露しました。老人介護施設の集会場を「TMW」の練習場所にお借りしている関係で、年2回入居者に向けてコンサートをしているのですが、皆さんも一緒に声を合わせ大きな声で唱い、涙を流して喜んでくださいます。歌の力を感じずにはいられません。

—最後に、読者にメッセージをお願いします。

何かに関心をもつことは無駄にはなりません。目標があれば、いつまでも若い気持ちでいられると思います。もしインド美術に関心をお持ちでしたら、ぜひ、美術館の「館長トーク」にいらしてください。

インドでのエピソードや歌のお話など、興味深いお話が満載で、もっとその先を知りたくなってしまいう語り口は、さすが長年幅広い世代に講義をしてこられた秋山さんでした。講義が聞きたくなくなった、目黒区美術館の「館長トーク」や放送大学の東京足立学習センターの公開講座へどうぞ。今後ともよろしくお願いたします。